

1 作物

項目	作業内容
<p>(1) 麦の栽培管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○麦の栽培管理 ○次年度水田のジャンボタニシ対策 <p>1 か月予報 (12 月 15 日高松地方気象台発表) では、気温は低く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多い見込みである。11 月の気温は高く推移し、特に早播き栽培では平年より生育が旺盛であるため、土入れや麦踏みを重点的に行う。また、中間追肥の施用など基本管理を励行し、適正な生育管理に努めることが重要である。</p> <p>ア 土入れ</p> <p>土入れ (写真 1) は肥効の向上、莖数調節、雑草防除、根際の乾燥防止に効果があり、排水溝の補修も兼ねた湿害防止対策になるため、特に排水不良のほ場では積極的に行う。</p> <p>土入れには跳上げローター付き管理機等を用い、1 cm 程度の厚さになるよう覆土する。</p> <p>土入れ後は溝を必ず排水溝につなぎ、降雨による滞水をすみやかにほ場外に排出するよう整備する。</p> <p>イ 麦踏み</p> <p>麦踏みは、莖の生育を一時的に抑制して徒長を防止し、適度な分けつ数を確保し、有効莖を増加させる効果がある (写真 2)。また根の発育を促し、耐寒性の強化、土壌乾燥時の根張りの促進や黄化症状の軽減が期待できる。</p> <p>3～4 葉期頃から莖立ち期までに 15 日程度の間隔で 3 回程度、鎮圧ローラー等で麦踏みする。特に早播きなどで過繁茂気味・徒長気味のほ場や、粗孔隙が大きく乾燥害を受けやすいほ場では必ず実施する。</p> <div data-bbox="962 884 1396 1227" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">写真 1 土入れ</p> <div data-bbox="962 1507 1396 1854" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">写真 2 麦踏み</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>ただし、土壌水分が多い状態で行うと、土が固くしまり、根の生育を阻害して逆効果となるため、土壌が乾いてから実施する。また、土入れと麦踏みを合わせて行うときは、先に麦踏みを行うと折れた茎葉を土が覆って生育障害を起こすため、<u>必ず麦踏み前に土入れを行う。</u></p> <p>ウ 中間追肥 11月播種のは場では、1月中下旬に中間追肥として10a当たりチッ素成分で2kg施用する。土壌pHの低下を防ぐため、肥料は硫安ではなく、NK化成を施用する。 湿害の発生したほ場や、葉色が落ちて黄化しているほ場では、生育促進のため中間追肥を必ず施用する。 また、はだか麦‘ハルヒメボシ’では、早めに播種し肥料が切れると黄化症状が発生しやすいため、葉色のSPAD値が40を下回らないうちに早めに追肥する。</p> <p>エ 雑草防除 1月になると、土壌処理した除草剤の効果が低下して、後発雑草が発生し始める。 特に土壌水分が高いほ場や出芽不良のほ場では雑草が繁茂しやすい。除草剤の処理にあたっては、雑草の発生状況を観察し、草種に応じた薬剤を選定のうえ、雑草の葉齢の小さいうちに散布する。 複数の草種が発生しているほ場では、一年生広葉雑草とイネ科雑草に効果があるハーモニー剤が比較的有効である。本剤はスズメノテッポウでは5葉期まで、カズノコグサでは3葉期までが散布適期で、時期を失ないように散布する。なお、湿害等により一時的に薬害（葉の黄化や生育抑制）を生じることがあるので、事前にはほ場の排水対策等を講じておく。 広葉雑草には、アクチノールB乳剤を雑草生育初期に散布する。ただし、カラスノエンドウは薬剤だけで除草するのは困難であるため、土入れや抜取り作業による完全除草に努める。</p> <p>(2)次年度水田のジャンボタニシ対策 冬季の耕うんは、ジャンボタニシを物理的に破砕するとともに、貝を厳寒期（1～2月）の寒風にさらすことで個体数を減らす効果が高いため、被害が目立つほ場では必ず実施する。土壌が乾燥して固い厳寒期にトラクタの走行速度を遅く、PTOを</p>

項 目	作 業 内 容
	上げてロータリーの回転を速くし、土壌を細かく砕くように耕うんする。未発生ほ場への貝を持ち込まないよう、トラクタを使用後は必ず洗浄し、付着した泥を洗い落としておく。

(作成 農林水産研究所)